

美に魅せられて

18

東大寺南大門仁王像

顔や胸、腹部の筋肉、肋骨などの表現には形式化と誇張がある。同じ写実を目指した天平期の守護神像の自然な肉身表現とは大いに異なる。© 飛鳥園



漱石の「夢十夜」を読んだのは高校一年のときであつた。こんな夢を見たとはじまり、十夜の夢が書かれていたが、第六夜の夢の内容だけがなぜか脳裡に刻まれていて、他の夢は忘れて思い出すことができない。どうしてこうなつたのか格別考えることもなかった。

第六夜はこんな夢である。運慶が護国寺の山門で仁王を刻んでいるというから見に行くと、見物人はみな明治の人間でどうして運慶が今まで生きているのかと思つた。無造作に鑿を使って、眉や鼻ができるものだと感心していると、若い男があれば眉や鼻を鑿でつくるんじゃない、眉と鼻が木の中に埋まつているのを鑿と槌で掘り出すまでだと言う。

彫刻とはつくるものではなく、木の中にあるものを鑿で取り出すものということによほど感動したのか、その後いつまでも記憶することになる。中年に達したころ、自分が美術史学を専攻したのは第六夜だけをいつまでも覚えていたからだ意識するようになった。

「夢十夜」を読んだとき、運慶の仁王像はすでに見ていた。それはとても大きい大きさの東大寺南大門の仁王像であつた。

東大寺は奈良時代に聖武天皇が平城京にあった大安・薬師・元興・興福寺を凌駕する寺院として発願したもので、国家の総力をあげて建立された大伽藍であつた。金銅仏では世界最大の十五メートルの盧舍那大仏、大仏殿も世界最大の木造建築で、講堂、中門、回廊、東西両塔、南大門もわが国の伽藍では大規模

な建築であつた。

大伽藍を擁する東大寺は平安時代には度重なる災害を受けたが、治承四年（一一八〇）、平・重衡の南都焼討ちで、堂塔の大部分は焼失してしまつた。堂内の仏像もともに灰燼に帰したことは言うまでもない。

こうした惨状に直面しその復興を目指したのが俊乗・房重源であつた。諸国を行脚して勸進につとめ、源頼朝の支援を引き出し復興事業を推進する。

重源上人の沙汰でつくられた二丈七尺に及ぶ巨大な南大門の仁王像は、誰が見てもその大きさに圧倒される。ヒノキ材を用いて木寄せを行い、内削りを施し、布貼り、錆下地をして彩色がなされていた。阿形像の像高は八三六・三センチ、吽形像は八四二・三センチ、口をカッと開く阿形、口を固く結ぶ吽形、両者は南大門内で向き合う。

仁王像は運慶・快慶をはじめとする多数の大仏師・小仏師の手でつくられたようだが、平成の解体修理時に阿形像から発見された墨書銘から、運慶を制作の統括責任者と考える見解が発表されている。八メートルを超える巨像の二軀にはわずかの破綻もなく、逆に肉身の緊張の一瞬をとらえる造形の統一感がある、統括者としての運慶の存在を推測できよう。

記録によると、巨大な仁王像は二か月ほどの短期間でつくられているが、ひよっとすると、ヒノキ材の中にいたのかもしれない。

大橋一章

Katsuki Ohashi
(アジア文化芸術協会会長)



【提供】アジア文化芸術協会 特定非営利活動法人

〒104-0061 中央区銀座7-17-1 銀座武蔵野ビル8F TEL 03-6741-1100



Bridge Asia Foundation

【企画制作】新潮社 【デザイン】大野リサ

美に魅せられて

33

正倉院の宝物

螺鈿紫檀五絃琵琶



四絃琵琶はペルシャ地方に起源をもつが、五絃琵琶はインドに起こり、パミール山脈を越え中央アジアから中国へ到達し、唐のころ完成したものと考えられている。この五絃琵琶は世界で唯一現存するまことに貴重なものである。©正倉院宝物

正倉院の宝物はこの倉のなかで千二百年間も保存されてきた伝世品として世界に類例のないものである。©正倉院正倉



毎年十月下旬から十一月にかけて奈良国立博物館で開かれる正倉院展を楽しみにしている人も多いと思われる。本年つまり令和元年は御即位記念の特別展として東京国立博物館でも十月十四日から十一月二十四日まで開催されるので、関東地方在住の人も正倉院の宝物を目の当たりにできることになった。

正倉院宝物の由来はおおよそ千二百年も遡ることになる。天平勝宝八年（七五六）五月二日に、東大寺の大仏造立の大本願であった聖武太上天皇が崩御した。その七七日に当たる六月二十一日、光明皇太后は聖武太上天皇のために国家の珍宝を捨し、東大寺に施入された。これは利他心にもとづく行為で喜捨（きしよ）ともいい、光明皇太后は中陰の満ちる日に死者追善の喜捨行為を実行し、聖武太上天皇の冥福を祈ったのである。

国家の珍宝のなかには聖武太上天皇の多くの愛用品もふくまれ、正倉院宝物の中心をなしている。このときの珍宝の目録、すなわち『国家珍宝帳』が伝来しており、そこには六百点をこえる珍宝の名称・数量・寸法・材質・色彩・技法・由緒までが記されている。これほどの宝物が千二百年間も保存されて今に伝来し、しかも宝物に関する文献史料である『国家珍宝帳』が同時に伝わる例は世界的にも稀有なものといえよう。

光明皇太后が東大寺に施入した国家の珍宝は盧舎那大仏に奉獻されたが、大仏の仏前に供えたわけではない。いうまでもなく未長く

大橋一章 Katsunaki Ohashi
(アジア文化芸術協会会長)

伝えるために東大寺の倉庫のうちもつとも重要なものを収蔵する正倉に納めることにした。院とは建物の周囲に垣をめぐらすことである。

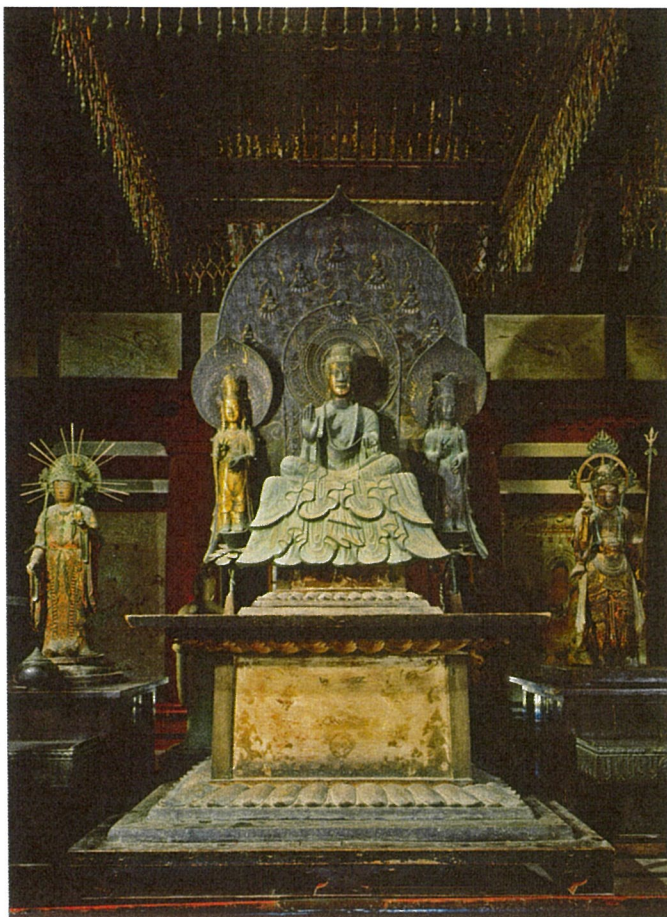
この正倉は南北約三三メートル、東西九・四メートル、床下二・七メートルの高床式の巨大木造建築で、寄棟造の瓦葺の大屋根をかける。初めて正倉を見た人はその大きさに圧倒されるが、南北に長い倉は北、中、南の三倉に分れており、北倉と南倉が校倉造で、中倉は板倉である。ここに収蔵されていた宝物は昭和三十七年（一九六二）に鉄骨鉄筋コンクリートの宝庫に移されたため、正倉のなかにはない。東京での展示で思わず溜め息がもれる宝物は螺鈿紫檀五絃琵琶であろう。楽器でありながら美しく装飾が施され、まるで美術工芸品のようだ。鑑賞の対象となり得る美的な作品として創出されたものである。

かたちは四絃琵琶とは異なり、まず五絃で、頭部が折れ曲がらず、頸がまっすぐのび、槽（背面）が厚くて細長い。紫檀を主たる材としているが、他の材も用いられている。腹板（表面の板）には瑠璃（龍甲）を花心とし、まわりを螺鈿と瑠璃の花弁で飾った小花文十三個を配する。捍撥（撥うけ）には瑠璃を貼り、螺鈿で上方には熱帯樹と五羽の飛鳥、下方には二こぶ駱駝の上で四絃琵琶を弾ずる胡人をあらわす。槽には螺鈿で上下に大宝相華文を、その間に含綬鳥（リボンや環珞をくわえた鳥）と飛雲を配す。まことに豪華絢爛たる楽器である。

[提供] AA アジア文化芸術協会 特定非営利活動法人 BAF Bridge Asia Foundation
〒104-0061 中央区銀座7-17-1 銀座武蔵野ビル6F TEL 03-6741-1100

[企画制作] 新潮社 [デザイン] 大野リサ

法隆寺《釈迦三尊像》



金堂は丈六仏用の大空間であるため、等身像の釈迦三尊像が見劣りしないように、大きな二重の台座と、それとワンセットの大きな天蓋をつくり、釈迦三尊を上下から包み込むようにしたため、小さな等身像でも違和感はない。二重台座の下座の台脚部の間口は244.0cm、天蓋南側の間口は243.5cmで、両者の差のわずか5mmは同じ長さでつくったにもかかわらず生じた誤差であろう。

■国宝《釈迦三尊像》 金堂所在
止利仏師作 飛鳥時代(7世紀)
銅造 像高=釈迦如来86.4cm、左脇侍90.7cm、右脇侍92.4cm
奈良県・法隆寺蔵 撮影:飛鳥園

法隆寺

奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺山内1-1
074517512555

新型コロナウイルス感染症が拡大するなか、久し振りに法隆寺を訪れた。南大門あたりには誰もおらず、境内でも参拝客を見かけない。この一年、人集りがするところはめっきり減ってしまった。四月三、四、五日に法隆寺では聖徳太子の千四百回忌の法要が営まれたが、コロナ禍のため随分気を使われたようだ。

世界最古の木造建築を誇るその法隆寺西院伽藍の金堂の本尊が釈迦三尊像である。もともと聖なる金堂内陣の中央の間を厳めしくも

占め、金堂を代表していることを示す。

釈迦三尊像は金堂の主役であるばかりか、わが飛鳥美術を代表する日本一の仏像と呼んでも過言ではない。美しく隙のない完璧なこの仏像をつくった鞍作鳥(止利)はどのようにして腕を磨いたのだろうか。

釈迦三尊像は中尊の釈迦像と両脇侍を蓮弁形の大光背でおおう一光三尊形式である。この大光背の裏面のほぼ中央部に一行十四字で十四行、合計一九六字の造像銘文が整然と刻まれ、本像の制作の由来が四六駢儷体の洗練された文体で記されている。

それによると、辛巳年の推古二十九年(六二二)十二月に聖徳太子の母親間人皇后が亡くなり、その翌月、つまり推古三十年の正月二十二日に聖徳太子が、つづいて太子の后が発病した。そこで別の太子妃と王子と諸臣らは太子等身の釈迦像の制作を発願して病氣平癒を祈り、もしも世に背くときは浄土に往生することを願った。しかしながら翌二月二十一日に后が、二十二日に太子が亡くなった。推古三十一年三月中に釈迦三尊像を完成させた。鞍作止利仏師につくらせたという。

わずか二箇月のうちに間人皇后、太子の后、聖徳太子の三人がつぎつぎと亡くなっていることからして、このとき三人は同じ宮殿に居て感染症の一種に罹っていたのかもしれない。造像銘文を読むかぎり、釈迦三尊像は聖徳太子が発病し亡くなったときにつくられているから、太子自身はその制作には関わっていないことになる。四人いた后(妃)のうち太

大橋一章

Katsuki Ohashi
(美術史家、アジア文化芸術協会会長)

子とともに亡くなったのは膳部加多夫古の女の善岐美郎女で、釈迦三尊像は蘇我馬子の女の刀自古郎女とその子の山背大兄王がつくり、斑鳩宮の一廊にあった瓦葺の小さな仏殿に置かれていた可能性が高い。

私見によると、法隆寺は飛鳥寺に次ぐ本格伽藍として推古十五年(六〇七)に聖徳太子が若草の地に発願・造営したが、天智九年(六七〇)四月三十日の夜半に落雷のため全焼した。再建事業は天武朝になって金堂からはじまるが、金堂の完成前の天武八年(六七九)の詔によって食封三百戸が停止されると工事は中断。この財政危機を乗り越えるために法隆寺の僧たちが案出したのは、法隆寺を太子発願寺院から太子信仰の寺院へ脱皮させることであった。

金堂内には太子ゆかりの釈迦三尊像、いまは夢殿所在の救世観音像、薬師如来像をあつめ、三組の大きな台座と天蓋をつくって安置し、より荘厳するために極彩色の壁画を描く。さらに法隆寺僧たちは太子の講經説話や七寺建立説話、超人的なカリスマ等の伝説を創作する。

こうした太子信仰なるものに賛同し、再建事業を援助する人物として、官廷の実力者で仏教帰依者の県犬養三千代を頼みとした。三千代の背後には軽皇子(後の文武天皇)の母である阿陪皇女(後の元明天皇)や祖母の持統天皇がおり、彼らの協力で再建、法隆寺は和銅四年(七一)に完成する。以後、法隆寺は太子信仰の寺として今に至るのである。